

目的 わが国における食生活は著しく改善され、食生活の内容も豊かになり、質的量的にも向上しているように見うけられる。そういった状況の中で学校給食の占める栄養的役割について考え、成長期に最も大切な蛋白質の摂取状況を調べ、質的検討をおこなうために、10才~12才までの学童を対象にして給食ならぬに朝夕の食事状況の実態調査を試みた。

方法 松山市某小学校4, 5, 6年生を対象として市の学校給食の共同献立のうち、昭和50年5月, 12月, の2ヵ月分を筆算とし、あわせて3日分の食事状況をアンケート方式により調査をおこなった。これらをFAO/WHO, 1973年, エネルギー・蛋白質の必要量をもとにして栄養分析をおこない学童の給食ならぬに1日の蛋白質, 必須アミノ酸の質的評価を検討した。

結果 給食の食事において、Lysは毎回充分に摂取されており、献立のうちパターンで比較したいわゆる充足度では、制限因子になったのは, Thr, S-A.Aでその値も90以上と高い値を示している。蛋白質, 必須アミノ酸摂取量もFAO/WHO1973年によって示された1日の必要量を充分にみたしている。又、摂取量のうち蛋白質50%, Lys53%を学校給食で占めている家庭もあり、動物性食品の種類別摂取状況も朝は卵類、夕は魚介類が多くなって牛乳の摂取量は朝夕ともに少なく、ほとんど学校給食で補なわれているのが現状である。これらの観点からしても現在の松山市の学校給食の栄養的役割は大きいと思われるが、しかし給食パンへのLys添加はいろいろな条件を考慮しても必要性はほとんどないように思われる。